

福州版一切経附載音釈の形成過程

山田健三*

1 はじめに

平安・鎌倉期に成立した日本の古辞書類の重要なソースの一つに、漢訳仏典附載音釈がある¹。漢訳仏典の小学書については、一切経音義、大般若経音義、法華経音義、など一般に「音義書」と呼称されるものがよく知られており、これらが経典本文とは別立ての一書を成しているのに対して、漢訳仏典附載音釈は、経典本文に附載されたグロッサリー様式のものである。両者は名称の上で区別されないこともあるが、本稿では、前者を「音義書」、後者を「附載音釈」と呼び分け (cf. 山田健三 (2005)), 一切経単位で附載音釈をつけた嚙矢と思われる福州版一切経の函別音釈の形成過程について論じる。

2 開宝蔵の附載音釈

さて附載音釈は、単体の仏典では巻末・帖末に掲載されるが、一切経となると、それらを整理分納した単位である「函」別に、その函に収められた経典本文全ての音釈を集めた一帖仕立ての音釈 (函別音釈) が存在する。そして、現在のところ、函別音釈の嚙矢は、宋版 (福州版) 一切経と考えられる。

周知のごとく、宋版一切経としては福州版に先行して開宝蔵が存在する。開宝蔵が宋版一切経の最初である。開宝蔵に音釈が存在したかどうかについては、開宝蔵の現物そのものがごく僅かしか発見・報告されていない現状では、ほとんど不明といわざるを得ないが、奈良県教育委員会 (2001) 『奈良県所在中国古版経調査報告書』に掲載された写真によると、開宝蔵の遺品 (開宝5年=972刊) として奈良市上之坊に伝わる『熾盛光災吉祥陀羅尼經』 (佛説熾盛光大威徳消災吉祥陀羅尼經 不空) 巻末には、一字だけではあるものの、「窒 古檀儀中叵云丁結反」という音釈が見られる。このことから、開宝蔵に函別ではない音釈が存在した可能性はあるものの、他の遺品については音釈存在についての報告を聞かないので (cf. 山田健三 (2005)), 一切経総てに渡って音釈が存在した可能性は高くないように思われる。

なお、開宝蔵に函別音釈が存在した可能性は、上述のように巻末音釈が存していることから見ても考えにくいだが、書物形態から考えた場合、開宝蔵は卷子本であることから見て、音釈を別仕立て一卷用意することは、可能性として皆無ではないにしても、その蓋然性は低いと思われる。

* kyama@shinshu-u.ac.jp

¹吉田金彦 (1954/1955), 池田証寿 (2005a, 2005b), 山田健三 (2005) 参照。

3 福州版一切経について

福州版一切経とは、東禅寺版一切経、開元寺版一切経の総称である。まず、両者の開版時期を確認しておこう。(表1)

東禅寺版 I	元豊 3 年 [1080] ~ 政和 2 年 [1112]	開板 (6339 卷)
開元寺版	政和 2 年 [1112] ~ 紹興 21 年 [1151]	開板
東禅寺版 II	乾道 5 年 [1169] ~ 淳熙 3 年 [1176]	続刊 (143 卷)

表 1：福州版の開版時期

表 1 に明らかなように、東禅寺版と開元寺版は、開版地（福州）・開版時期ともに接近していることなどから、両者が共同出版であったと考えられていた時期もあったが、常盤大定（1913）によって、それぞれ独自の出版印刷を行なっていることが明らかにされている。

よって、最古のものは東禅寺版であり、研究対象としては、東禅寺版を対象にすべきであるが、東禅寺版・開元寺版それぞれ独自の出版印刷を行っているとはいっても、両者に共通する刻工も少なくなく、時に東禅寺版と開元寺版の版種の弁別は困難である。また日本に現存するのは、両者の混合蔵が多い。筆者が調査しえた宮内庁書陵部蔵本も、両者の混合であり、しかも、附載音釈本文に関しても、両者は形式・内容両方に於いて基本的に同一であることが知られているので²、両者を併せた「福州版」を調査対象として当面大きな問題はないと考えられる。

4 一切経附載音釈の形成過程

一切経という膨大なテキスト群の整理・収集自体は、福州版成立までにも、かなりの歴史・蓄積があるが、そこに、簡易とはいえ新たに辞書的情報を付す作業は容易な作業ではない。一切経という膨大なテキスト群を対象とした音釈はどのように形成されたか。

原理的には、次の 3 つの方法のいずれかと考えられる。

- A：一切経テキストに対する音釈
- B：既存の単独仏典テキストの附載音釈を集成
- C：A、B の混合

福州版の附載音釈が、もし一切経全体を対象とする最初のものであるとしたならば、そこには、A のような統一的な音釈プロジェクトが行われたことが推察されるが、6,000 巻を超えるテキストを対象とした音釈の作成が一朝一夕にできるとは到底考えられないし、それまでも単体の仏典に対する附載音釈や音義書が作られて来ているわけであるから、B のような既存の附載音釈テキストの利用はむしろ自然であると考えられる。

²山田（2005）参照。

しかし、既存の附載音釈を参照・再編集し得たとしても、それらが単にソースもしくは参考資料として用いられただけで、別に、フォーマットも含めて、統一的な作業方針が存在したのであれば、それをAの統一プロジェクトとみなすことは可能であり、むしろそう考えるべきかも知れない。一方、いくら形式が整えられたとしても、その内容が既存の附載音釈そのままであるならば、それを統一プロジェクトと呼んでよいのか、という議論もありうる。こういった議論は、どちらの立場をとるにせよ、既存の知られている資料の枠内で考えるしかなく、結局のところ程度問題として考えるしかない。

よって、以下に検討するのは「一切経」という一大叢書を構築するに当たって、附載音釈としての統一的フォーマットが存在しているのかどうか、という一点に限定せざるを得ない。

4.1 タイトル・フォーマットから

ここで、その統一的フォーマットが存在したかを確認するために、まずは、それが形式的によく現れると思われる各函の附載音釈のタイトルに注目した。

なお、調査対象とするデータは、宮内庁書陵部蔵本である。欠本やタイトル表示部分が破損などにより欠けているものなどは「不明」とした。なお、若干存在する帖末音釈は対象外としてある³。

結果については、資料編1 (p.8) に示した。

表を通覧すると、次のように整理できる。

1. 函名表示によるタイトル

「*x*字函釋音」「*x*字函音釋」「*x*字函」「*x*字函音」「*x*字函釋音義」「*x*字函經音釋」「*x*字帙音釋」「*x*字函經音」「*x*字釋音」

2. 仏典名表示によるタイトル

「妙法蓮華經」「首楞華嚴經音釋」「華嚴經合論釋音」

数の上では圧倒的に函名表示タイトルが多く、その中では「*x*字函釋音」「*x*字函音釋」が最も数が多いが、いくつものヴァリエーションも存在する。しかし、これらのヴァリエーションよりも、仏典名表示タイトルとの差異の方が明らかに大きい。

130鳳函に収められた「妙法蓮華經」音釈、196染函の「首楞華嚴經音釋」583會函～595頗函の「華嚴經合論釋音」が存在しうるのは、当然、一函に収められた仏典テキストが複数ではないからこそである。例えば一函に26経収められている200羊字函などは、「羊字函釋音」などのように、函字名をタイトルにするしかない。

しかし、一函に収められる仏典テキストが一つであれば、仏典名表示タイトルになっているわけでは必ずしもない。例えば、001天函～060奈函に収められているのは、大般若経600巻であるが「大般若経音釈」などとは記されず、総て函名による音釈タイトルであり、むしろこのような例がほとんどである。つまり、仏典名表示タイトルは、その数も多くないことから考えて、やはり異質なのである。

さらに、附載音釈は通常その著者・編者名は記されていないが、「華嚴經合論釋音」の場合は、最初の583會函の音釈には「雪川釋 恒遂 集」とあり、撰者名「恒遂」が明記され

ており、既存音釈を収録した事実のあることは明らかである。ちなみに、この「華嚴經合論釋音」は、義天（高麗）編『新編諸宗教蔵総録・第一』（高麗宣宗7年=1090年成立）が「(大華嚴經)合論音義十二卷 恒遂集」（高山寺蔵安元二年写本、『高山寺資料叢書17・高山寺古典籍纂集』p.251）として掲げるものと見てよいであろう。

この事実は、附載音釈の形成過程が、「一切經」という叢書単位に対して音釈作業が行われたわけではなく、個別に成立していた単經音釈をそのまま収集、という側面のあることが想定でき、少なくとも上述の「一切經テキスト（集成仏典テキスト）に対する音釈」のみによってこの附載音釈が成立したものではないことは明らかである。

しかし、このように、一部の仏典に既存の単經音釈を利用できたとしても、総ての仏典について可能なわけでもなく、多くの仏典については、新たな音釈作業が必要であった可能性が想定され、それが多く共通するタイトルで現れているものと考えられる。

また、一切經として仏典を千字文の文字函に整理収納するにあたって、その整理単位が「函」になり、音釈自体が上述のように函別に収められていることから考えて、「単独仏典テキストの音釈を集成」という方法だけでの実践は不可能であろう。

4.2 版式の異なる音釈

福州版一切經本文の版面は「每行十七字詰、三十行乃至三十六行、一面六行の五折か、六折の折帖仕立である」（大蔵会編（1964：43））。この版式は、大多数の音釈の帖においても当てはまり、当然のことであるが、一切經本文も音釈も同じ版式で作られたことが判る。ちなみに、音釈における双行注（割注）部分は、小書きになってはいるが、一字分の縦配置スペースは、掲出字分のスペースと全く同じで、文字の大きさに関係なく、一行十七字詰になっている。

4.2.1 130鳳字函の「妙法蓮華經」音釈

しかし、130鳳字函に収められている「妙法蓮華經」音釈は、一紙配行数・一折配行数は同一であるが、一行配字数は行毎に異っており、上述のように大多数の音釈が、双行注の小字であっても本文の大字であっても同縦スペースを確保しているのとは異なる。よって、横一列に文字が並ばず（敢えてカウントすれば一行16字程度か）、タイトルのみならず、版式も異なることは明らかであり、既存の附載音釈の再利用と見做してよいかと思われる。おそらくこの「妙法蓮華經」音釈は、福州版一切經に組み込まれるに当たったのフィルターは通っていないと見てよいだろう。

但し、版式の違いのみから既存附載音釈の再利用と見ることは困難そうである。以下に述べる。

4.2.2 422渭字函の「渭字函釋音」

422渭字函の「渭字函釋音」は、資料編1の表に明らかなごとく、タイトルは大多数のものと同じだが、その版面を観察すると、上述の130鳳字函の「妙法蓮華經」の音釈とよく

³書陵部本の帖末音釈については、山田健三（2005）参照。

似た版式であり（一行16字程度）、大多数の版式とは異なる。

しかし、422渭字函には「分別功德論三卷、四諦論四卷、辟支佛因縁論一卷、十八部論一卷、部異執論一卷、異部宗輪論一卷」の都合6種のテキストが収められており、これらが函単位でありながら、他と異なる版式で作られていることは、どのように考えればよいのか。

「渭字函釋音」の版式が異なることから、130鳳字函の「妙法蓮華經」音積と同様に、福州版とは別に作られた既存附載音積と見做すと、福州版一切経に先行して函別の附載音積が存在した可能性を示唆することになるし、福州版において異なる版式も存在し得たならば、そもそも統一的なフォーマットを考えること自体が無意味になる。

版式の異なるものは全体としては少ないので、そこに当然何らかの意味があると思われるが、残念ながら、異本の調査も含めた資料収集・資料整備が進行していない現在、これ以上の議論ができる状態にない。他日を期したい。

5 音積作業

5.1 重複字（語）からみた音積の入力と出力

次に音積形成過程を別の面から考える。

テキストに即した音積を作る行為を「音積作業」と呼ぶことにすると、その音積作業が、テキストのどの単位を対象にしていたかを考えることで、音積形成過程の一端をある程度推定することができそうである。

その推定可能根拠は次の通りである。

各テキストのテキスト量は様々であるが、テキストそのものは基本的に巻単位で存在している。例えば一切経において最大のテキスト量を有する大般若経は600巻という巻単位であるが、一切経では10巻10帖を1函として計60函に収納している。

音積作業自体は、冒頭から最後に向かって行われるであろうが、その入力レベルで生じるであろう注すべき字（語）の重複をどのように処理するか、ということである。具体的な音積入力作業実態はブラックボックスであるものの、同一巻内でも重複字（語）が生ずる可能性は当然あるにも関わらず、これまで観察してきたところでは巻内で重複字が掲出された例を見ないことから推定すると、音積作業の出力レベルで統一（マージ）されていることが考えられる。このことから、音積作業の入力レベルと出力レベルを分けて考える必要性が生じる。

さて、附載音積が巻単位に附載されている場合は、巻単位で統一（マージ）が行われた音積をそのまま出力すればよいだろうが、函単位の函別音積の場合はどうなるのか。

以下、その点について検討する。

5.2 音積作業方針

さて、音積作業は、それぞれの具体的なテキストに対して行われるわけであるが、実際にはどのように行われたのであろうか。一般論として、次のような諸点が問題となろう。

1. どの語（漢字）に注をつけるか？（注すべき語はどれか）：掲出語選定

2. どの程度の掲出語を選定するか? : 掲出語量
3. どのように掲出するか? : 掲出方法 (初出/全部/任意)
4. どのような注をつけるか? : 注情報 (音情報・意味情報・字体情報) 選択
5. どの程度の情報量をつけるか? : 注情報量

当然、これらは音釈目的と関わるわけであるが、掲出語に関わる1～3についてのみ着目した調査を行ない、先ず、福州版(東禅寺版)大般若経(全600巻)の函別音釈(宮内庁書陵部蔵、一部欠本あり)を対象データとした結果について述べる。

大般若経選択の理由は、量的に最大規模であり、同一語が複数回出現することが期待できる点にあり、同一語がどのように現われるかによって、音釈単位が推定可能となるからである。

6 福州版大般若経附載音釈にみる音釈作業

当該音釈を通覧すると、頻出する掲出語の存在に気づく。ここでは、上記の問題を考えるための指標として、頻出する「玄奘」と「苾芻」を選び、その分布を調べた。

結果は、資料編2 (p.10) に示す通りである。

ここから、次の結果が確認される。

1. 今回の調査範囲では、掲出語量の最小値は2、最大値は301、と、極めて大幅な差がある。
2. 当該音釈に頻出する語(「玄奘」と「苾芻」を例とした)の分布を調べてみると、
 - (a) 出現しても一函あたり一回まで。
 - (b) 「玄奘」⁴が出現する場合、常に函に収められた最初の巻で出現する。しかもその最初。

1. から、掲出語量にある程度の目標値があるわけではないこと、また2～301というかなりの開きがあることからして、掲出語数に選定基準の存在しないことが明らかである。

2. からは、音釈単位は函単位で行なわれ、掲出語選択される際は函単位での初出が選出されること、が強く推定される。

総ての音釈についての検討ができていないわけではないが、085万字函の、無量清浄平等覚経の上巻と下巻にそれぞれ「樂樂」という項目が出現している。これは極めて近い箇所に出現し、上述の仮説の反例となりそうであるが、それぞれの注文を見ると、次のように音が異なっており、別語認識であることが判明する。

⁴実際には「奘」だけが掲出語となっているものも含めている。この違いは、掲出方法(出力方法)の違いに過ぎず、具体的に音釈対象とされた「語」というレベルでは、「玄奘」と同じと見て何ら問題はないと考えられる。「奘」とだけあるものにも「法師名」という義注が存在するものがあることから明らかであろう。

1. 樂樂 上音岳下音落
2. 樂樂 上音落下吾孝反

さて、ここでの調査結果を宋版一切経附載音積全てに適応できるかどうかは、更なる調査の積み重ねが必要ではあるが、少なくとも、大般若経附載音積に関しては、出力単位は函単位であることが判明した。

7. おわりに

以上の検討から、福州版の附載音積について明らかになったのは次の2点である。

1. (タイトル・フォーマットの点から見ると) 若干の既存附載音積を利用した可能性はあるものの、多くは同一フォーマットで形成されている。
2. 音積出力単位は、帖単位ではなく、函単位で行なわれた。

さて、福州版に続く思溪版は、附載音積を帖単位に変更し、帖末に附載する形式をとっている。この後、漢訳版経の附載音積は、帖別附載音積がスタンダードになっていくようであるが、思溪版の附載音積は、まだごく一部の調査しかできていないものの、福州版の函別音積からそのまま巻別に分けて、それを当該の帖に配分しただけのもののようにあり、その音積の在り方に疑問なしとしない。別に考える機会を持ちたい。

参考文献

1. 池田 証寿 (2005a) 高山寺蔵新訳華嚴経音義と宮内庁書陵部蔵宋版華嚴経『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』汲古書院
2. 池田 証寿 (2005b) 高山寺本新訳華嚴経音義について『漢文讀法とアジア文字』(ソウル)
3. 大蔵会編 (1964) 『大蔵経—成立と変遷—』百華苑
4. 同朋学園佛教文化研究所 (1979) 『本源寺蔵宋版一切経調査報告』
5. 常盤 大定 (1913) 大蔵経雕印考(承前)『哲学雑誌』28巻314
6. 奈良県教育委員会 (2001) 『奈良県所在中国古版経調査報告書』奈良県教育委員会
7. 山田 健三 (2005) 『漢訳版経附載音積に関する基礎的研究』科研費報告書
8. 吉田 金彦 (1954/1955) 図書寮本類聚名義抄出典攷(上・中・下)『訓点語と訓点資料』2, 3, 5

(付記) 本稿は、国際ワークショップ「典籍交流(訓読)と漢字情報」(2006年8月22日, 北海道大学)での発表内容を一部含む。

資料編1—書陵部蔵宋版一切経附載音釈のタイトル—

首題/尾題	数	該当函
<i>x</i> 字函釋音/ <i>x</i> 字函釋音	145	001 天, 002 地, 003 玄, 004 黃, 005 宇, 007 洪, 008 荒, 009 日, 010 月, 013 辰, 017 寒, 018 來, 019 暑, 020 往, 021 秋, 023 冬, 025 閏, 026 餘, 027 成, 028 歲, 029 律, 030 呂, 032 陽, 033 雲, 034 騰, 035 致, 036 雨, 037 露, 038 結, 039 爲, 040 霜, 043 麗, 044 水, 045 玉, 046 出, 048 岡, 050 號, 051 巨, 052 闕, 053 珠, 056 光, 057 果, 058 珍, 059 李, 060 奈, 073 龍, 074 師, 075 火, 076 帝, 077 鳥, 079 人, 082 制, 083 文, 111 平, 114 育, 115 黎, 117 臣, 123 壹, 124 體, 125 率, 148 髮, 150 大, 192 量, 193 墨, 195 絲, 205 尅, 206 念, 207 作, 209 德, 211 名, 214 端, 215 表, 216 正, 217 空, 218 谷, 220 聲, 222 堂, 223 習, 226 因, 228 積, 229 福, 230 緣, 231 善, 237 寸, 241 資, 260 薄, 265 似, 266 蘭, 268 馨, 287 安, 423 據, 454 瑟, 455 吹, 465 右, 468 内, 471 承, 474 集, 475 墳, 476 典, 492 相, 493 路, 495 槐, 496 卿, 498 封, 499 八, 500 縣, 502 給, 504 兵, 505 高, 506 冠, 507 陪, 508 輩, 510 蔽, 514 祿, 515 侈, 516 富, 517 車, 518 駕, 519 肥, 520 輕, 521 策, 522 功, 523 茂, 537 奄, 538 宅, 539 曲, 540 阜, 541 微, 542 且, 542 孰, 544 營, 545 桓, 546 公, 547 匡, 548 合, 549 濟, 551 扶, 553 傾, 555 漢, 556 惠, 559 武, 560 丁, 561 俊, 562 乂, 564 勿
<i>x</i> 字函釋音/ <i>x</i> 字音 (但し小字)	1	081 始
<i>x</i> 字函釋音/ <i>x</i> 字函音釋	6	084 字, 200 羊, 258 深, 462 轉 (写), 473 既, 491 將
<i>x</i> 字函釋音/(不明)	8	006 宙, 011 盈, 047 崑, 054 稱, 055 夜, 080 皇, 202 行, 478 聚
(不明)/ <i>x</i> 字函釋音	5	182 恃, 501 家, 550 弱, 558 感
<i>x</i> 字函釋音/ <i>x</i> 字釋音	2	422 涓, 467 廣
<i>x</i> 字函釋音/ <i>x</i> 字函釋音義	1	453 鼓
<i>x</i> 字函釋音/ <i>x</i> 字函	1	497 戸
<i>x</i> 字函音釋/ <i>x</i> 字函音釋	186	022 収, 106 朝, 109 垂, 110 拱, 112 章, 113 愛, 116 首, 122 邇, 194 悲, 197 詩, 199 羔, 203 維, 204 賢, 208 聖, 210 建, 212 立, 213 形, 219 傳, 221 虛, 225 禍, 227 惡, 232 慶, 233 尺, 234 璧, 235 非, 236 寶, 238 陰, 239 是, 240 競, 245 曰, 247 與, 248 敬, 249 孝, 250 當, 252 力, 253 忠, 256 命, 257 臨, 259 履, 261 夙, 262 興, 263 温, 264 清, 267 斯, 269 如, 270 松, 273 川, 274 流, 275 不, 276 息, 277 淵, 278 澄, 279 取, 280 映, 281 容, 282 止, 284 思, 285 言, 286 辭, 289 篤, 290 初, 291 誠, 292 美, 293 慎, 295 宜, 296 令, 297 榮, 298 業, 299 所, 300 基, 301 籍, 303 無, 304 竟, 305 學, 306 優, 308 仕, 309 攝, 311 從, 312 政, 313 存, 315 甘, 317 去, 318 而, 319 益, 320 詠, 321 樂, 322 殊, 323 貴, 324 賤, 325 禮, 326 別, 327 尊, 328 卑, 329 上, 330 和, 331 下, 332 睦, 333 夫, 334 唱, 335 婦, 336 隨, 337 外, 338 受, 339 傳, 340 訓, 341 入, 342 奉, 344 儀, 345 諸, 346 姑, 347 伯, 348 叔, 349 猶, 350 子, 351 比, 352 兒, 353 孔, 354 懷, 355 兄, 356 弟, 357 同, 360 枝, 361 交, 362 友, 363 投, 364 分, 365 切, 366 磨, 367 箴, 368 規, 369 仁, 370 慈, 371 隱, 372 惻, 373 造, 374 次, 375 弗, 376 離, 377 節, 378 義, 379 廉, 380 退, 383 匪, 385 性, 386 靜, 387 情, 389 心, 390 動, 392 疲, 393 守, 394 眞, 395 志, 396 滿, 397 逐, 398 物, 399 意, 400 移, 401 豎, 402 持, 403 雅, 404 操, 408 糜, 409 都, 410 邑, 411 華, 412 夏, 415 二, 416 京, 417 背, 418 邨, 419 面, 420 洛, 421 浮, 424 涇, 427 盤, 428 鬱, 430 觀, 431 飛, 432 驚, 449 肆, 450 筵, 451 設, 452 席, 456 筌, 457 昇, 466 通
(不明)/ <i>x</i> 字函音釋	6	078 官, 224 聰, 302 甚, 359 連, 382 沛, 384 虧

<i>x</i> 字函音釋／(不明)	4	254 則, 314 以, 316 棠, 406 爵
<i>x</i> 字函音釋／ <i>x</i> 字函釋音	4	271 之, 288 定, 413 東, 469 左
<i>x</i> 字函音釋／ <i>x</i> 字函音	1	242 父
<i>x</i> 字函音釋／ <i>x</i> 字音釋	4	244 君, 246 嚴, 255 盡, 426 殿
<i>x</i> 字函音釋／ <i>x</i> 字釋音	1	463 疑
<i>x</i> 字函音釋／ <i>x</i> 字函釋	1	388 逸
<i>x</i> 字函音釋／ <i>x</i> 字音	1	283 若
<i>x</i> 字函音釋／音全(小字)	1	358 氣
<i>x</i> 字函音釋／(止尾)	1	414 西
<i>x</i> 字函經音釋／ <i>x</i> 字函音釋	1	251 竭
<i>x</i> 字秩音釋／ <i>x</i> 字函音釋	1	448 楹
<i>x</i> 字釋音／ <i>x</i> 字秩音釋	1	494 俠
<i>x</i> 字函／ナン	10	061 菜, 062 重, 063 芥, 064 薑, 065 海, 066 鹹, 067 河, 068 淡, 069 鱗, 070 潛, 120 羌
<i>x</i> 字函／ <i>x</i> 字函	17	071 羽, 085 乃, 086 服, 091 讓, 092 國, 093 有, 094 虞, 097 弔, 099 伐, 101 周, 105 坐, 134 駒, 183 己, 187 可, 343 母, 405 好, 407 自
<i>x</i> 字函／ <i>x</i> 字函音	28	087 衣, 089 推, 107 問, 118 伏, 119 戎, 121 遯, 128 王, 133 白, 138 被, 141 頰, 145 蓋, 146 此, 151 五, 154 惟, 156 養, 160 傷, 161 女, 163 貞, 164 潔, 167 才, 171 必, 174 能, 176 忘, 178 談, 190 欲, 310 職, 486 書, 487 壁
<i>x</i> 字函／ <i>x</i> 字經音	1	088 裳
<i>x</i> 字函／ <i>x</i> 字函音釋	7	071 翔, 090 位, 131 在, 149 四, 166 効, 184 長, 447 對
<i>x</i> 字函／ <i>x</i> 字函釋音	6	429 樓, 464 星, 477 亦, 488 經, 489 府, 503 千
<i>x</i> 字函／ <i>x</i> 字經音釋	1	185 信
<i>x</i> 字函／ <i>x</i> 字音	11	095 陶, 126 寶, 127 歸, 129 鳴, 139 草, 153 恭, 162 慕, 170 過, 175 莫, 179 彼, 472 明
<i>x</i> 字函／ <i>x</i> 字釋音	1	470 達
<i>x</i> 字函／ <i>x</i> 音(但し小字)	1	104 湯
<i>x</i> 字函／大藏隨函經音義	1	102 發
<i>x</i> 字函／(不明)	1	509 驅
<i>x</i> 字函音／ <i>x</i> 字音	3	096 唐, 103 殷, 173 得
<i>x</i> 字函音／ <i>x</i> 字函音	21	098 民, 100 罪, 108 道, 136 場, 137 化, 140 木, 143 萬, 144 方, 147 身, 152 常, 155 鞠, 157 豈, 159 毀, 168 良, 169 知, 180 短, 181 靡, 186 使, 189 器, 191 難, 513 世
<i>x</i> 字函音／ <i>x</i> 字函音釋	1	198 讚
<i>x</i> 字函經音／ <i>x</i> 字函音	1	425 宮
<i>x</i> 字音／ <i>x</i> 字函音	1	158 敢
<i>x</i> 字音／(ナン)	1	483 鍾
<i>x</i> 字音／ <i>x</i> 字音一秩	1	485 漆
(ナン)／(ナン)	1	490 羅
(不明)／ <i>x</i> 字函音	1	512 纓
妙法蓮華經／(ナン)	1	130 鳳
首楞華嚴經音釋／首楞華嚴經音釋	1	196 染
華嚴經合論釋音／華嚴經合論釋音	12	583 會, 584 盟, 585 何, 586 遵, 587 約, 588 法, 589 韓, 590 弊, 591 煩, 592 刑, 593 起, 594 剪
華嚴經合論釋音／(不明)	1	595 頗
ナン(法苑珠林)／字音一卷	1	484 隸
不明(欠, 不明)	24	012 昃, 014 宿, 015 列, 016 張, 024 藏, 031 調, 041 金, 042 生, 049 劍, 132 樹, 135 食, 165 男, 172 改, 177 罔, 189 覆, 201 景, 243 事, 272 盛, 294 終, 307 登, 381 顛, 391 神, 511 振, 563 密(不明)

資料編 2 一福州版（東禪寺版）大般若經附載音釈の掲出語量と頻出語例一

凡例

1. 底本は宮内庁書陵部蔵本。
2. 欠本は、() で示している。
3. 掲出語数は、附載音釈に掲載された掲出語の数をカウントしたものであるが、附載音釈自体が破損・欠落などによって不完全な場合、その程度に応じて、語数を推定できるものは、アスタリスクを付した上で具体的な数を示したり、破損・欠落部分が少ない場合は「(判明する数) + α 」という表示を施している。全く推定できない場合は、単に「*」印を入れてある。
4. 語例「玄奘」「苾芻」欄における()の中の数字は、当該の語が掲載されている巻の数を示す。
5. 「芻」の異体字で今昔文字鏡フォントにも見られないものは、後に β , γ を付して弁別している。

函	巻	掲出語数	「玄奘」	「苾芻」
001 天字函	大般若經 001-010	51		苾芻 [上頻必反] (001)
002 地字函	大般若經 011-020	5		
003 玄字函	大般若經 021-030	4	玄奘 [下慈朗反] (021)	
004 黄字函	大般若經 031-040	6	奘 [慈朗反法師名] (031)	
005 字字函	大般若經 041-050	49	奘 [慈朗反法師名] (041)	苾芻 γ [上頻必反又步結反下楚俱反亦作芻香草也] (045)
006 宙字函	大般若經 051-060	109		苾芻 β [上頻必反又步結反下楚俱反亦作芻芻 β 目出家曰——] (054)
007 洪字函	大般若經 061-070	7	玄奘 [下慈朗反法師名] (061)	
008 荒字函	大般若經 071-080	45		
009 日字函	大般若經 081-090	14	奘 [慈朗反法師名] (081)	苾芻芻 β 芻 γ [上頻必反又步結反下三字同用楚俱反香草也比出家之人] (081)
010 月字函	大般若經 091-100	19		苾芻 γ [上頻必反又步結反下楚俱反亦作芻芻 β 香草也故喻出家人] (100)
011 盈字函	大般若經 101-110	50	奘 [慈朗反法師名] (101)	苾芻 γ [上步結頻必二反下楚俱反亦作芻——香草也比出家二衆] (104)
(012 昃字函)	(大般若經 111-120)			
013 辰字函	大般若經 121-130	43		
(014 宿字函)	(大般若經 131-140)			
(015 列字函)	(大般若經 141-150)			
(016 張字函)	(大般若經 151-160)			

017 寒字函	大般若經 161-170	11		
018 來字函	大般若經 171-180	15	奘 [慈朗反] (171)	
019 暑字函	大般若經 181-190	27		
020 往字函	大般若經 191-200	5		苾芻芻 [上蒲結反下正楚俱反] (192)
021 秋字函	大般若經 201-210	2		
022 取字函	大般若經 211-220	8	玄奘 [下慈朗反唐三藏法師名] (211)	
023 冬字函	大般若經 221-230	22		
024 藏字函	大般若經 231-240			
025 閏字函	大般若經 241-250	24		苾芻 [上步結反下楚俱反] (243)
026 餘字函	大般若經 251-260	9		苾芻 [上蒲結反下楚俱反] (251)
027 成字函	大般若經 261-270	18		苾芻 [上頻必反下楚俱反] (262)
028 歲字函	大般若經 271-280	13		
029 律字函	大般若經 281-290	11		
030 呂字函	大般若經 291-300	24		苾芻 γ [上頻必反又少結反下楚俱反亦作芻 β 香草也故喻出家之人也] (291)
(031 調字函)	(大般若經 301-310)			
032 陽字函	大般若經 311-320	28		
033 雲字函	大般若經 321-330	61		苾芻 γ [上頻必反又步結反下昌愚反] (326)
034 騰字函	大般若經 331-340	49		苾芻 γ [上頻必步結二反下楚俱反亦作芻——香草也比出家二衆] (331)
035 致字函	大般若經 341-350	53		苾芻 γ [上頻必又步結反下楚俱反亦作芻香草也故比出家二衆] (346)
036 雨字函	大般若經 351-360	17		
037 露字函	大般若經 361-370	34		
038 結字函	大般若經 371-380	35		苾芻 γ [上步結頻必二反楚俱反亦作芻 β ——香草也比喻出家人] (373)
039 爲字函	大般若經 381-390	72		苾芻 γ [上頻必反又步結反下楚俱反一作芻——香草也比出家二衆也] (387)
040 霜字函	大般若經 391-400	129		苾芻 γ [上頻必反又步結反下昌俱反正作芻香草也比出家之人] (394)
(041 金字函)	(大般若經 401-410)			
042 生字函	大般若經 411-420	49	奘 [慈朗反] (411)	苾芻 γ [上頻必反] (415)
043 麗字函	大般若經 421-430	92		苾芻 γ [上頻必反下楚俱反] (426)

044	水字函	大般若經 431-440	76		苾芻 γ [上步結反又頻必反下楚俱反亦作芻 β 芻並同用] (435)
045	玉字函	大般若經 441-450	*		苾芻 γ [上頻必反下楚俱反亦作芻香草也比出家人] (441)
046	出字函	大般若經 451-460	109	奘 [慈朗反] (451)	
047	崑字函	大般若經 461-470	*	奘 [慈朗反] (461)	
048	岡字函	大般若經 471-480	98		苾芻 γ [上頻必反] (474)
(049)	劍字函	(大般若經 481-490)			
050	號字函	大般若經 491-500	30		苾芻 β [上頻必步結二反下楚俱反正作芻香草也比出家人] (500)
051	巨字函	大般若經 501-510	*131		苾芻 β [上頻必反下楚俱反香草也比出家二宗] (508)
052	闕字函	大般若經 511-520	103		苾芻 β [上頻必步結二反下楚俱反香草也比出家二衆也] (511)
053	珠字函	大般若經 521-530	56		苾芻 β [上頻必反下楚俱反——香草也故比出家人] (522)
054	称字函	大般若經 531-540	79+ α		苾芻 [上頻必步結二反下楚俱反俗作芻 β ——香草也比出家二衆] (533)
055	夜字函	大般若經 541-550	123		苾芻 γ [上頻必步結二反下楚俱反正作芻香草也比出家二衆也] (541)
056	光字函	大般若經 551-560	138		苾芻 γ [上頻必步結二反下楚俱反正作芻香草也比出... (虫損)] (541)
057	果字函	大般若經 561-570	216		苾芻 γ [上頻必反下楚俱反亦作芻香草也比出家人] (561)
058	珍字函	大般若經 571-580	301	奘 [慈朗反法師名] (571)	苾芻 [上頻必步結二反下楚俱反亦作芻 β 芻——香草也比出家二衆] (571)
059	李字函	大般若經 581-590	157		苾芻 [上頻必步結二反下楚俱反正作芻香草也比出家二衆也] (584)
060	奈字函	大般若經 591-600	140		苾芻 β [上頻必步結二反——楚俱反] (591)

(2008年11月7日受理, 11月18日揭載承認)